

S. Donaudy “36 Arie di stile antico” 研究 VI

— オペラ作品との関わりを視点として その4 —

枝 川 一 也

(2011年10月6日受理)

A Study on S. Donaudy “36 Arie di stile antico” VI
— Regarding his operatic works No.4 —

Kazuya Edagawa

Abstract: There are nearly no historical materials or documents, nor prior detailed research regarding Stefano Donaudy (1879 to 1925, Italian). I feel that such research would be significant and important. Accordingly, I have been researching Donaudy from the perspective of being a musician and have studied him from various viewpoints from the clues in his musical output. This paper consists of a Japanese translation of the text of the second act of Donaudy's fourth opera entitled *Sperduti Nel Buio* (1907). I believe that the translation of this opera will not only allow for the singing of this piece but also serve as didactic material for musicians studying the staging of the opera.

Key words: S. Donaudy, Opera

キーワード：S. ドナウディ、オペラ

はじめに

筆者は Stefano Donaudy (1879. 2. 21-1925. 5. 30) の36の歌曲集, “36 Arie di stile antico” (古典様式による36のアリア) の楽曲・内容分析を試みるために, 様々な視点から考察を進めている。36の歌曲集の中の数曲は, 国内外で声楽家のレパートリーとしてしばしば演奏され, 広く親しまれている。それに対して, 彼がオペラ作曲家であったことはほとんど知られていないであろう。筆者は Donaudy の我が国における愛好家の広がりに対して, 西洋諸国での関心が稀薄なこと, Donaudy に関する歴史的な文献資料, 詳しい先行研究がほとんどないことに研究の意義と必要性を感じている。演奏家の立場から, 楽譜を手がかりに様々な観点から研究を進め, Donaudy の意図を明らかにしたいと考えている。

本稿では, 1907年に作曲された Donaudy 第4作目のオペラ “*Sperduti nel buio*” の第2幕のテキストに

ついて, ヴォーカルスコアに基づき, テキストの日本語対訳をト書きと併せて掲載する¹⁾。

SPERDUTI NEL BUIO (1907)

R. Bracco 劇原作 A. Donaudy 脚本

闇に紛れて 第二幕

〈ヴァッレンツァ公爵〉

〈ボシッリポ海岸を見下ろすヴァッレンツァ公爵邸の中庭を区切るバラスト (欄干)。バラストの奥側は数体の天使像で装飾されている。バラストの右側が途切れており, それぞれの欄干がカーブを描きながらそのまま階段の手すりとなって庭園へと続く。その下には庭園があるが, ここから見えるのは松の古木の先端とマロニエの茂みのみ。マロニエは海岸へ向かって次第に下がってゆく。左手に公爵邸の袖が見える。公爵邸は厳粛で優雅な感じの建物である。白い大理石の短い階段があり, それを数段上がると公爵邸の1階

へと入る。右手には応接室が、左手には公爵の書斎がある。階段の近くに、楕円形のテーブルがあり、16人分の豪華なご馳走が並んでいる。右手には、短い並木道がエントランスへと続くのが良く見える。左手の、公爵邸の袖とパラスターとの間にも別の並木道がある。庭園の向こうには、穏やかに輝く海が見える。彼方には、日没の空にあらかた溶け込むようにして、羽飾りのような形の煙をたなびかせたベスピオス山が見える。日が暮れるに連れて、その頂がだんだんと赤みを帯びてくる。中庭のあちこちに、珍しい植物やデッキチュア（2つずつ配置されている）、籐の肘掛け椅子とテーブルがある。）

（昼食会が終わり、客たちが公爵のテーブルを囲んで座っている。テーブルの上は乱雑になっている。テーブルの片端に空席が一つあり、その隣に座ったグイドルフィの音頭で、客たちが大声で笑いながら乾杯をする。反対側の端のロロツテの隣に公爵が座っている。公爵は、客たちと一緒に笑ったり冗談を言ったりするが、時々辛辣な冗談に無理して笑ったりし、気分が悪いのに、気を紛らせてそれに打ち勝とうとしているかのような様子。召使たちが邸宅の袖の裏から忙しそうに出入りする。ボーイたちは、客に葉巻たばこを勧めたり、コーヒヤリキュールを注いだりしている。）

男性客たち〈笑ったり拍手喝采したりしながら〉

アッハッハッハ！うまいぞ、グイドルフィ！

女性客たち〈抗議しながら〉

それは酷過ぎるわ…

公爵

返事をしないのか、ロロツテ？

ロロツテ〈立ち上がりながら〉今するわよ。

グイドルフィ

間違えないように気をつけろよ。

ロロツテ

それでは、乾杯といきましょう…

女性客たち〈ロロツテをそそのかしながら〉

その調子よ！ 〈数人の女性客〉

いいわよ！ 〈他の数人の女性客〉

ロロツテ

…まずは公爵さまと乾杯…

客たち

いいわよ！ 〈数人の女性客〉

うまい！ 〈他の数人の女性客たち〉

ロロツテ 〈動作を中断し、戸惑う様子〉

…それに…

グイドルフィ〈勝ち誇ったように立ち上がり〉

それに？

ロロツテ

とにかく、どうでもいいから乾杯！

〈テーブルの上に上がり、横になって、片肘をつき、もう片方の手を伸ばしてシャンペンのグラスを持ち上げる。〉

乾杯！アッハッハ！

〈急に腕を伸ばして、テーブルの客たちにふんだんにシャンペンを注ぐ。あえてテーブルにもこぼす。〉

お酒をたくさんこぼして、たんと儲けましょう！

お酒がこぼれて濡れるほど、たくさん儲かる！

こぼさないで誰も濡れないなら、飢え死にしてしまおうわ。皆が濡れたら、ダイヤモンドだらけで輝き、あなたしか濡れないなら…

〈グイドルフィに向かって〉

おお、哀れな私よ！〈笑う者、コメントする者、
そうだそうだと賛成する者〉

女性客たち 〈グイドルフィを嘲笑して〉

アッハッハ！グイドルフィは？

客たち

無実を晴らすなら、今だぞ！！

グイドルフィ

〈公爵が他の客たちと共にテーブルから立ち上がる。〉

一銭もかかっていなんだ…これが真実さ…

ロロツテ〈召使たちが、テーブルの後片付けを始める。〉

恥をお知り！

公爵

こいつめ！

〈ロロツテの腰に腕を回して引き寄せるが、テーブルを半周したところで、疲れたように席に戻り、籐の肘掛け椅子に座る。ロロツテは公爵の隣に来て、椅子の肘掛に体全体をもたせかけ、公爵に甘えるような仕草でうっとりとして煙草をふかす。その間に、客たちの中には、女性を口説く者、おしゃべりをする者、散歩をする者あり。〉

ロロツテ

〈公爵に向かって、ゆったりと煙草をふかしながら〉

さあ、今度は本当のことを教えてね。

本当に重症だったの？

公爵

私は不治の病を患っているのだよ、ロロツテ。

ロロツテ〈母性本能に満ちた調子でとがめるように〉

あらまあ、何てことを言うの？

女性客たち〈数人ずつ公爵に近寄って取り囲む。〉

どうしたの？ 〈数人の女性客〉

ねえ、何なのよ？ 〈他の数人の女性客たち〉

公爵

いとしき友たちよ、今日、私は半世紀の誕生日を

迎えた…
〈悔しさに満ち、無理に陽気を装った調子〉
女性客たち
これからも楽しく行きましょうよ…あともう半世紀は生き長らえるわ、きっと。

公爵
誰がそれを保証してくれるというのだ？
100歳までは無理だろう…

女性客たち どうして？

公爵
どうも、悪魔に狙われているような気がするのだ。
女性客たち 〈公爵に近寄り、ふざけて笑いながら、公爵の髪や髭をいじりまわす。〉
あらら！白髪だらけじゃないの！〈数人の女性客〉
こんなに皺だらけ！ 〈他の数人の女性客たち〉
こんなに皺だらけ！ 〈女性客全員〉

ロロッテ
〈自分が首にかけていたネックレスの1本から、銀の枠にはめられた小さな鏡を外して〉
ちょっと鏡をのぞいてごらん…ハッハ！
何が見える？自分じゃないみたいでしょ？

女性客たち 〈公爵にさらに近寄って〉
うわあ、お年寄りだわ、お年寄り！
〈鏡を怖いほどじっと見つめ、そこから目を離すことができない。〉

公爵
本当だ…もう、自分の顔とはわからぬほど老けてしまった…
自分の影になってしまいそうだ！

ロロッテ 〈公爵の手から鏡を取る。〉
何言ってるのよ！今のは冗談よ…

グイドルフィ
冗談だよ…

公爵 〈目を見開き、肘掛を掴んで体を前に突き出す。〉
羽の生えた吸血鬼に取りつかれ、血管という血管から血を吸われているような感じだ…
〈発作に襲われ、気を失ってぐったりとする。〉
〈客たちがそれに気付く。ロロッテとグイドルフィが頭を支える。けれども公爵はすぐに回復し、あたかも喋ることができないかのように、夢見のような目つきであたりを見回す。〉
今のは何だったのだろうか？

ロロッテ 〈色々と手当てをしたり、世話を焼きつつ〉
何でもないわ。大丈夫よ…

公爵 〈悲しげに首を振って〉
いやいや、そんなことは言わなくてくれ。
昨日、医者達の話を持ち聞きしてしまったのだ！

いずれにせよ、私はこれ以上生き長らえることができない運命なのだ…

ロロッテ 〈いつもの陽気を繕おうと、励ますように笑い出す。〉

アッハッハッハ！貴方、そんなこと言っておかしいわよ。ちゃんちゃらおかしいわ！…

ずっと若々しくいられるはずの貴方じゃないの！
〈入り口の並木道からリヴィアが入ってくる。輝くように美しく優雅な姿。すぐにリヴィアを囲んで歓迎する客たちに対し、おごそかに会釈する。しなやかで妖婦的な曖昧さに満ちた身のこなしで歩み出る。〉

客たち
おお、リヴィアよ！〈会釈、数人の客が握手する。〉

女性客たち
ほら、来た。

リヴィア 〈公爵に会釈しながら〉
公爵様…

公爵 〈突如起き上がるが自制する。無理して愛想をつくり、微笑しながらリヴィアの隣に行く。〉
もう来ないのと思っていたよ。

リヴィア
晩餐会や宴会のある場所には、私が顔を出さないってご存知でしょ。

公爵 〈皮肉っぽく〉
そんなに宴会が嫌いなのかい？

リヴィア
ええ。

〈豪華なオーバーコートがすべり落ち、黒いデコルテ（襟ぐりの大きなドレス）に包まれた艶やかな姿が現れる。深みのある、謎めいた妖婦的な表情で囁く。〉

私が好きなのは、胸を揺らぐような謎が、古めかしい言葉ですすり泣くように語りかけてくるような場所や、平穏で静かな物を私だけが支配できる場所…お酒がたくさんあって陽気な場所には、謎も魔力もあったもんじゃない。
だから宴会なんか大嫌いなよ！

〈不思議にも、リヴィアの言葉に支配され、それに対抗するかのように、いかにも挑発的な態度で〉

公爵
それなら、ちよいと早すぎたよだね。
ちょうど今乾杯をしようとしていたところだ…
さあ、グラスを上げて！ 〈召使たちに〉

〈召使たちはグラスの乗った盆を持って回って歩く。それぞれの客にグラスを配り、すぐにシャンパンを注ぐ。公爵はあらん限りの力を振り絞って立ち上がる。元気を取り戻そうとして頑張り、実際本人は元気になったような気になる。〉

ロロッテよ、そりゃそうだ！一陣の風くらいで榎の木（たくましい人）が倒れるわけがない。まだまだ私の体には猛々しく血が漲っているぞ。本当に、永遠なる我が若き血よ！

〈力強くグラスを持ち上げる。時々気分が悪くなるが、それと戦いながら最後までなんとか持ちこたえる。〉

事業の遂行と酔いの楽しみに乾杯！
そして手に入れた女たちに乾杯！
グラスにワインを！……

〈皆が飲む。召使が新たにシャンパンを注ぎながらあちこちを回って歩く。〉

〈公爵がリヴィアに向かって反逆的な態度で衝動的にグラスを持ち上げる。〉

そして、私をとりこにしたリヴィア嬢に乾杯！
グラスを空けよう…私の血を吸い上げた如く！…
〈他の客たちにはお構いなしに、その魅力に征服されるままに、哀願するようにリヴィアに近づく。〉
リヴィアよ、お前にはまだまだ酔わされるぞ。誰もがお前の愛を獲得したというなら、過去にも未来にも果てしないこの渴望で、今まで味わえなかったような快樂の波に私を溺れさせてくれ…
永遠に飽くことのないこの渇きよ…そしてこの…
苦悩はさまよう…我が暗き思いよ…

〈気を失いかけるが、力を取り戻す。発作的に笑う。〉
アッハッハ、グラスにワインを…

〈皆がグラスを持ち上げ、公爵のグラスと乾杯する。各人の口元が微笑み、祝福をほのめかす態度。公爵の言葉に含まれた深い悲嘆と破滅の様子に気付く者はない。リヴィアだけが異様に感銘を受けた様子で、立ち上がり、他の客たちから離れ、ただ一人感慨に満ちた態度で座っている。〉

女性客たち

その調子、公爵さま！

ロロッテ 〈頬に強く唇を押し当てる。〉

ご褒美にキスをして差しあげるわ…

グイドルフィ 〈キスをするように、リヴィアに寄る。〉

それからかたきを打とうぜ、リヴィア。

リヴィア 〈リヴィアは威厳を持って身を引く。〉

いいえ。〈一人孤独にバラストーに寄りかかり、皆に背を向けて海を眺める。〉

グイドルフィ 〈気分を害し、皮肉一杯に嘲笑い、叫ぶ。〉

公爵夫人はご機嫌斜めだとさ！

ロロッテ 〈公爵に向かって小声で〉

ところでリヴィアと結婚なさるって、本当なの？

公爵 〈小馬鹿にしたような調子でリヴィアの隣へ〉

とんでもない！

夜の帳が静かに下りて…

リヴィアよ、お前の謎もひっそりと降りてきた。皆様にそれを味わってはいいただきたくない…
ご婦人方、ちよいと庭園に来られませんか？

〈女性客たちに向かって〉

女性客たち 〈喜んでその提案を受けて〉

行きましょう。

リヴィア 〈公爵に近づき、耳元でこっそりと囁く。〉
後でお話したいことがありますの。

ここに残っていてね。

〈客の誘いを受け、腕を組み、庭園への階段を下りる。〉

ロロッテ 〈公爵の腕によりかかりながら〉

公爵様とご一緒に。暗闇は私も大好きですよ…
グイドルフィ〈揺り椅子にゆったりと身を任せたまま〉
…お歳がばれませんか！

ロロッテ 〈快活にグイドルフィの方を向いて〉

お生憎様、まだ歳なんか取ってませんわよ。とんだお間違いよ。ついこの間まで、若向きの格好をしていましたわ…この間まで小娘でしたのよ…短いドレスを着ていたわ、ええ…

グイドルフィ

バレリーナみたいに。

ロロッテ 〈ロロッテは公爵の腕から離れ、公爵は他の客達と遠ざかって行く。グイドルフィも不承不承付いて行く。〉

さあ、おいで…“おばちゃん”に聞いてみましょ！

〈太って帽子を被った一人の女性客の所へ駆けてゆき、彼女を取り囲み、皆で庭園への階段を下りてゆく。〉
〈その笑いと喋り声が遠ざかり、生い茂った木々の中へと消えてゆく。〉

〈中庭は空虚で物音一つしない。辺りが夕暮れになる。〉

〈ヌンツィオとパオリーナが入り口の並木道からやって来る。パオリーナがヌンツィオの数歩先を歩き、ヌンツィオは片手をパオリーナの肩にかけ、もう片方手でバイオリンを持つ。バイオリンには、暗褐色の布のカバーがかかっている。〉

ヌンツィオ

まだ誰にも会っていないのかい？

パオリーナ

こちらで止まりましょうよ。

〈ヌンツィオから離れる。バラストーに近寄り、庭園を覗く。〉

庭を散歩してるわ。また戻って来そうよ。

〈パオリーナは歩き回るが、ヌンツィオは立ち止まったまま。パオリーナの肩から外した手はだらりと下がり、頭を上向きにして、パオリーナを待つ様子〉

ヌンツィオ 〈片手を伸ばしてパオリーナを探す。〉

で…何処にいるんだい？

パオリーナ
すぐ近くよ。
〈あちこちを見ながら、ヌンツィオに近づきもせず、
いいかげんに答える。〉

ヌンツィオ 〈手で探り続ける。〉
さて、今夜は一つ拍手をいただきたいものだ。
やる気満々だ。パオリーナよ？

パオリーナ 〈煩わしいかのように、ぶっくらぼうに〉
何よ？

ヌンツィオ
本物の音楽を聞かせてやろう。
そして、僕が奏でるバイオリンの曲には、素晴らしいものがたくさんあるんだ。 〈沈黙する。〉
おい、聴いているのかい？
〈パオリーナは階段を一段上がり、一番手前のガラス戸の近くで中を覗く。子供っぽい驚きの声を上げる。〉

パオリーナ
まあ！

ヌンツィオ
一体何をしてるんだい？

パオリーナ
あなたの目が見えたらよかったのに！来てごらん
なさい。〈動かずに、悲しげに頭を振りながら〉
〈中をずっと覗きながら、もっと驚いて〉
大広間があるの…素晴らしい物で一杯の広間よ…
素晴らしい物が、それはたくさんあるのよ…
言葉では言い表せないくらい豪華な物ばかりよ…
絨毯は床だけじゃない、壁全体に張り詰めて…
いったいどうして壁にも絨毯があるのかしら？

ヌンツィオ 〈ひょうきんに数歩前に出て〉
どうしてかなあ…
きっと、お金持ちの人たちが、退屈して壁の近くに
座って頭を後に垂れるとき(退屈した人の様子)
に、その方が安心だからだろう。
〈2番目のガラス戸のところへ来て〉
ちょっと来てごらんよ…

パオリーナ
待つて。まだあるわ！
鏡と金色だらけの広間が…

ヌンツィオ 〈驚いた表情で二、三度覗きながら、戻る。〉
きっと応接間だわ。来てごらん。

パオリーナ
なんて豪華なのかしら！宝物だらけだわ。

ヌンツィオ 〈優しく、パオリーナの片手を取り〉
話しておくれ。今夜僕たちを待っているあの横丁
の薄暗い小部屋と、あの屋敷で一人っきりで暮ら
すのは、どっちがいいと思う？

パオリーナ 〈正直な思いをすぐに悟られまいとして〉
こんなに美しい邸宅は、今まで見たことなく…

ヌンツィオ
だから？

パオリーナ 〈肩をすくめて〉
何だっていうの？わからないわよ…

ヌンツィオ
いや。何か言っておくれ…
〈不意に恥じらうような様子になる。無意識にヌンツィオを苦しめることに気付いたかのように〉

パオリーナ 〈ヌンツィオの手を取って、優しく聞く。〉
そりゃあね、いいなどは思うわ。それじゃ駄目？
〈そして、自分の本心にやや微笑みながら、顔を上げて返事を待つ〉 〈黙ったまま頭を傾ける。〉

ヌンツィオ
それはそうさ。その通りでいいんだよ。

パオリーナ
あなたは？

ヌンツィオ
僕はそうは思わない。
〈これまでにも増して穏やかに微笑む。心の底に隠してきた強い愛情を、ここで初めてパオリーナに打ち明けることだけに気持ちを集中して〉
僕の魂の中には、もはや…天国があるから。
世界中で僕にとって、君ほど嬉しいものはない。
なぜなら、僕の運命は君だけの手中にあるから。
君のために…僕の歩みは、嬉しい時も悲しい時も
光のある時も陰っている時も進んで行く…
僕の歩みは…

パオリーナ 〈すまなそうに〉
でも、あなたは目が見えないでしょ…

ヌンツィオ
きっと、見えないからこそ、そうなんだ。

パオリーナ
このお屋敷があなたにも見えたなら…その時は！

ヌンツィオ 〈否定するかのように首を振って〉
そう思うかい？

パオリーナ 〈ヌンツィオの片手を取って〉
ヌンツィオ…

ヌンツィオ 〈微笑みながら首を振って〉
パオリーナ？もうそのことは考えないよ。
〈不意に、人目を盗むようにしてヌンツィオの手に口づけする。物乞いをしていた頃、許しを請うためにやっていたように、びくびくして〉
〈夜になる。遠く彼方の海から、水夫たちの呼び声が聞こえる。見知らぬ者や居残ったものへの最後の別れを告げるような声。ヌンツィオは、それに服従

するかのように海に向かって腕を伸ばし、頭を持ち上げる。パオリーナも沈黙する。彼女もまた時の詩に服従し、無意識に待ちわびるような雰囲気。遠く無限の広がり消えてゆく黒点を目で追いながら)

中からの声 〈遠くで〉

ああ！…

ヌンツィオ

海からの呼び声が悲しげに響くよ。

たくさんいるのかい？見てごらん。

パオリーナ

大型のタータン（帆船）が出て行くところだわ…

ヌンツィオ 〈夢見心地で繰り返す。〉

船出か…

〈最後の呼び声が聞こえ、その後は深い静けさに包まれる。海のそよ風、かすかに聞こえる波音〉

夢ではないのかな…

行き先は遠い国なのだろうか？

パオリーナ 〈回想にふけり、今までになく優しい声で〉

子供の頃は、夢の中であの国に行ったっけ。

宝物を探して…

こうして遠い国に思いを馳せて…夢を見たわ…

ヌンツィオ 〈パオリーナの少女時代の遠い思い出に、

暖かく微笑みながら〉

そう、夢の島…宝島！それは素敵な所に違いない。

〈包み込むような優しさで〉

苦痛が他人にわからぬ土地で

相思相愛で孤独に暮らす…

パオリーナ

そうね、でもその国は遠いの、よっぽど遠いのよ

…あの彼方なの！…ヌンツィオ。

苦痛が他人にわからぬ土地で、孤独に暮らす！…

〈戻ってくる仲間たちのガヤガヤいう声。内容は聞き取れない。〉

〈辺りはかなり暗くなっている。男女の客たちが、カップルや少人数の組になって三々五々広間に入って来る。右側の並木道から戻って来る者、庭園の階段から来る者。広間は、電球に明かりが灯されて、すぐに輝かしさを取り戻す。（先着組の中に、公爵がいる。孤独で押し黙った様子）2、3人の客に囲まれたガイドルフィもやって来る。間もなく、他の客たちも追いつき、彼を取り囲んで質問攻めにする。辛口の返事をするたびに、どっと笑い声が上がる。ヌンツィオとパオリーナは人目を忍んで、明かりの点いていない一番手前の入り口に身を寄せる。〉

客たち

まだ見つけていないホクロがあるんだって？

ガイドルフィ

そうさ。

客たち

何処だろう？何処だろう？

ガイドルフィ

乳房のところさ…

客たち〈その間にロロッテと女性客たちもやって来る。

固まって、謎めいた様子で内緒話をしている。〉

あの暗闇の中でですって？…

ガイドルフィ

見てはいないけれど、…触っちゃったのさ！

女性客たち 〈広間の中を見回しながら〉

ほら、公爵がもう戻ってるわよ…

客たち 〈笑う〉

アッハッハッハ！

ロロッテ

いいじゃないの？また来るわよ。

女性客たち

また来るわよ。何があったのかしら。

なぜなのかしら？…

ロロッテ・女性客たち

なぜかしら…

客たち

話してくれよ。

ガイドルフィ 〈四方を見回して〉

聞かれてしまうとまずいから…

ちょっと奥の方へ移動しようぜ。

女性客たち

何、秘密の話？

ガイドルフィ 冒険談さ…

ロロッテ

私、全部聞いてしまったわよ…

ガイドルフィ

…その後でどうなったかを話すぞ。

ロロッテ

ここにいるわよ。

女性客たち〈ガイドルフィと男性客たちが広間に入る。〉

ここにいるんだって？ 〈皮肉っぽく笑う。〉

隠れた純愛物語ね、アッハッハ！

ロロッテ 〈木立の間を見ながら〉

ほら、あそこよ。行きましょう。

女性客たち 〈広間に入る。〉

ええ。

〈リヴィアが最後に一人でやって来る。誰も見えないので、安心しきっている。〉

リヴィア 〈ヌンツィオとパオリーナがぴったりと寄り添っているのが見える。とげとげしい態度で二人を包囲する。〉

あなたたち、どなた？…

パオリーナ 〈怖気づいたように身を縮めて〉

ヌンツィオ、あなたが答えてよ…

ヌンツィオ 〈哀れなほど従順に、一歩前に出て〉

私は目の見えない者でございます。

これは私の相棒です。 〈パオリーナを示して〉

リヴィア 〈階段を上がって書斎の入り口で立ち止まり、尊大な態度で呼ぶ。〉

アンドレア？ここよ、ここよ。

〈書斎から出てきてリヴィアの前に立ちはだかるアンドレアに、ヌンツィオとパオリーナを指し示す。哀れな二人はますます互いに身を寄せ合う。〉

誰がこんな乞食どもを入れたんだ？

ヌンツィオ

乞食ではありませんぬ…

パオリーナ 〈怖気づき、目を伏せ、服を引っばる。〉

黙ってて！

ヌンツィオ

私はバイオリン弾きです。夏には、こうしてお屋敷からお屋敷へと訪ねてまいります。

今日はここで宴会が催された様子ですので、相棒に、行って見よう、と申し上げました。

リヴィア 〈召使に〉

残飯をやって、すぐに出て行ってもらいなさい…

〈ヌンツィオが何歩か近づいたので、さらに付け加えるように、声を大きくして叫ぶ。〉

しっ、あっちへお行き！…

パオリーナ 〈ヌンツィオを引き寄せながら、小声で〉

黙って…行きましょ。

〈アンドレアの後について、二人はゆっくりと屋敷の左袖から出て行く。〉

〈一人残ったリヴィアは、階段を数段降りて、明かりの点いた広間を眺める。まるで獲物を狙う猫のような動作。すでに夜になっている。月明かり一つない闇夜。バスピオス山の頂が次第に火を吹き始める。〉
〈公爵が広間から出てガラス戸を閉める。リヴィアの態度に気付いて、決めかねるように手を止める。一瞬、黙ったまま、じっと見つめながら向き合う二人。〉

リヴィア 〈つっけんどんに〉

先ほど、公爵様のお口から不審なお言葉をお聞きしましてよ。さあ、面と向かって、私の罪を咎めてちょうだい…言ってちょうだい。私のせいで寿命が縮まってしまったとおっしゃるの？

公爵 〈冷淡に〉

実にその通りだ。

リヴィア 〈憤慨せずに、聞き出すように〉

それでは、私のことをお嫌いになったのでしょ…

公爵 〈力強く〉

しかし、お前の破壊的な力には感服するよ…

リヴィア 吸血鬼よ！

公爵

でも、快楽の波に吞まれて死ぬことを私が望んだのではないか。お前のためなら、それも構わぬ…

実際、死神に取られる命をお前に返してやろう…

リヴィア 〈光る波が顔の前を通るように、一瞬衝撃を受けるが、すぐに何もなかった振りをする。〉

公爵様は？

公爵 〈断固とした声で〉

そうだ。こうして、お前を選ぶことで報われたらう、リヴィア。

〈暗い感じに戻って〉

私が死んだら、書き物机の引き出しの奥をよく探すんだぞ。一枚の紙があるから。

〈書斎を指しながら〉

あの証書により、遺産はお前のものとなるのだ…子孫は誰もいないのだから。〈暗い声になる。〉

〈だがこの言葉とともに、目をかっつと見開き、宙をしかと見つめる。もう一つの大きく切実な問題が思い浮かぶ。慄きに襲われ、非常に興奮した様子になる。〉

少なくとも、今私の知る限りでは、誰もいないし、誰の申し出もないのだが…

神の前に真実を隠すことはできない！

神の前ではな、リヴィア！

神の前で、私は今までものがき苦しんできた自責の念に目を閉じ、虚しくあがくのだ…

リヴィアよ、実は、私には娘がいるのだ！…

〈腕を高く伸ばして振りながら、急に激しい声で〉

リヴィア

いったい何処に？…〈びくっとするが、自制する。〉

公爵

それは分からない。

〈恐ろしそうに辺りを見回す。言ってしまった言葉の重みと、自分の無力に打ちひしがれたような様子。黙ってまた座るが、想い出が次々と襲ってきて、黙っていることができない。〉

遠い昔、屋敷を訪れた従順な乙女の処女を奪った。僅かな金を渡すと、娘は文句も言わずに去った。だが、1年ほど過ぎた時、ばったりと娘に会ってしまった。私の屋敷の前にいたのだ。私を見ると娘は立ち上がり、小さな乳飲み子を差し出して、こう言った：

『旦那様、この赤ん坊は貴方様の子です』

当時、私は信じない振りをした。

娘にはお金を送り、その後のある晩、薄汚い路地

で一度見かけたほかは、それ以来会ったことはない。目つきの悪い墮落女の幽霊のような姿をしていた。だが、我が娘は、今いったいどこに？
あの世界は、無限の海。いろいろな意味で、いろいろな運命にとって無限なのだ。

今宵の暗闇に吸い込まれるように、生きた人間も死骸も呑み込まれてしまうのだ。

それにしても我が娘は何処に？

ああ、居所を知ることができたら。

それができたら、辛い苦悩も喜んで受けるのに。

我が娘の所へ行けたならば！〈ぐったりと倒れる。〉

リヴィア 〈心の中の嫌悪に顔を引きつらせるが、それを隠して平静を保ちつつ〉

その場所をもっと探してみたら…

何かわかるかも？

ある日、やっと抱きしめることができたなら、

限りない喜びで長生きもできるでしょう…

で、これが公爵様への私の願ひよ。

公爵 〈詮索するように、じっと目を見つめながら〉

長生きを願うその唇の言葉は偽りではないか？

リヴィア 〈公爵の視線を逃れようとしながら〉

私に邪悪な思いがあると疑ってらっしゃるのね…

公爵 〈立ち上がりながら〉

お前を疑うぞ！

リヴィア 〈怒りを込めて荒々しく〉

ああ、私が、死臭のある場所を探りまわるハイエナにでも似てるとおっしゃるのね。

飢えて死肉をむさばり食うハイエナに？

とんでもない！…財産は娘さんに差し上げて！

私はそんなもの欲しくはないわ！もう帰ります。

さようなら！…〈オーバーコートを取りに行く。〉

公爵

〈興奮し熱狂的になり、酔った勢いで病的なほどに悶えながらリヴィアにしがみ付く。〉

ああ、リヴィアよ、私を置いていかないでくれ！

お前の勝ちさ！娘を探すのはよそう！

後悔でこんなに心を痛めた今となっては、

我が欲望にまた身を任せよう。

お前の力には対抗できない！

リヴィア

ええ！まだこれからもあなたを愛しむわ…

心行くまで味わって…さあ、また私の胸へ！

また貴方に酔ってしまうわ。

〈公爵の顔を見つめて情熱を込めて熱っぽく語る。〉

また貴方に口付けするわ！

また貴方に新しく恋をし直すわ！

公爵

今までのように、不実なお前でいておくれ！

そして私を苦しめておくれ！

これでいいのだ、そんなお前が好きなのだから…

そのままがいい、そのままのお前が好きさ。

リヴィア

あなたへの我が愛は大海の如し。

絶えず航行する者に新たな喜びを与えましょう…

今まで航行し慣れて来たこの懐に戻っていらして。

岸のないこの海に！

言って頂戴…貴方は私のものかしら？

私だけのものね？そうでしょう？

公爵 〈リヴィアを強く抱きしめて〉

たった一人の我が愛人よ、私を捨てないでくれ！

お前に助けを求めるぞ！

どうか私を捨てないでおくれ！…

私はお前のものだ！お前にぞっこんだ！！

〈暫く抱きしめ合う。〉

〈広間のガラス戸を通して、陽気でひょうきんな声が聞こえてくる。〉

ゲイドルフィの声

純愛物語はこれでおしまいな？

ロロッテの声

公爵様、羨ましい限りですわ…

他の客たちの声

さあ、こちらへおいでください…早く。

公爵 〈リヴィアから離れて〉

先に行っていておくれ。少し休んでいくから…

〈リヴィアは広間へ向かう。〉

〈リヴィアが広間へ入ると、皆のオーという声で迎ええられる。満足と混乱の声、何やら言葉にならぬ声〉

客全員

オー！

〈公爵は気が抜けたように、がくりと膝を落とし、何歩か歩み出るが、すぐに立ち止まる。手を胸に当て、息の詰まったような呻き声を上げる。〉

公爵

おお！…これは一体何なのだ？！

苦しい！息ができない！死神に襲われたらしい！

〈息ができず、声も出ない。〉

〈何か言おうとするが、声にならない。叫ぼうとして力むが、声にならず、肘掛け椅子に倒れ込む。〉

リヴィアの声

〈大広間からは銀鈴を鳴らすような扇情的なりヴィアの笑い声が響く。〉

アッハッハッハ！

公爵 〈不意に何かを心得たように、最後の力を振り絞り、立ち上がる。〉

ああ、あの悪女め！
あんな奴に財産を取られてたまるものか！
〈書斎まで歩いて辿り着こうとする。〉
〈椅子につかまる。〉
〈口ごもりながら、階段を少し上る。〉
とんでもないぞ！あんな奴にやるものか！
〈腕を伸ばし、両手で入り口の柱を掴むが、不意に麻痺し、階段にどさりと倒れ、息を引き取る。〉
〈暗闇に沈黙。大広間だけ明るくなっている。〉
〈ヌンツィオとパオリーナが、屋敷の裏手の並木道から現れる。バラスターに沿って奥の中庭を通り抜ける。美しいナポリ湾に微かな漁火が見える。遠くの呼び声が聞こえる。港を出て行く小型帆船の火である。流浪の二人は、しばし歩みを止めてその音に耳を傾けた後、また夜歩きを始める。来た時の道に戻り、二つの影のように静かに歩き続ける。〉

中からの声

ああ！…

S. DONAUDY Opera Completa per Canto e Pianoforte SPERDUTI NEL BUIO G. RICORDI & Co. 1906 を参照した。

おわりに

拙稿²⁾において、ドナウディのオペラ作品には36の歌曲集に見られると同様の緻密な発想標語の付記があり、加えて、登場人物の心情や動作をこと細かく規定した莫大なト書き (didascalia) の付記があることが非常に特徴的であると述べた。本稿では Sperduti nel buio 第2幕の日本語対訳を掲載した。登場人物名・歌詞の訳・前後に付されたト書きの訳の列記は楽譜の進行に準じている。ト書きの多さを前述したが、各登場人物の歌唱部分において、全くト書きの付されていない場面は全体の約34%であった。そしてこのうちの6割が主要キャスト4名 (ヌンツィオ・パオリーナ・公爵・リヴィア) 以外の脇役に相当する。つまり主要キャストの歌唱については、歌唱の際の演技上の指示

が台本作者によってほぼ規定されていたと考えてよいだろう。逆に、ト書きの付されていない公爵とリヴィアの2重唱の部分 (前ページ右段参照) は、歌手たちにどう表現するかを委ねられた唯一の部分であり、興味深い。またこの箇所は、二人が初めて同時に歌うこの幕のクライマックスであることにも注目したい。

ドナウディのオペラ作品は、そのト書きの多さにより、演出家に依存しすぎないオペラ公演となり得る作品と考えることができるだけでなく、様々なオペラ作品の登場人物を演じる際、演技について考え悩む歌手のための教科書的作用を持っているのではないかと考える。

これまでに筆者は、声楽学習者にとってドナウディの36の歌曲集が、楽譜に記される様々な発想標語を理解し、より良い演奏に反映させるかという課題を、解決する教科書的作用を持つことを、様々な観点から述べた³⁾。その結果、ドナウディの歌曲集とオペラ作品の教育的価値及び存在意義を筆者なりに見出すことができたと思われる。

今後更なる考察を進め、具体的・効果的な活用法を述べていきたいと考える。

【注】

- 1) 第1幕の日本語対訳については、拙稿 S. Donaudy 作曲 R. Bracco 劇原作 A. Donaudy 脚本 SPERDUTI NEL BUIO 第1幕『闇に紛れて』(訳) 広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXI 2009.3 を参照していただきたい。
- 2) 拙稿 S. Donaudy “36 Arie di stile antico” 研究 III—オペラ作品との関わりを視点として— 広島大学大学院教育学研究科紀要 (文化教育開発関連領域) 第二部 第56号 2007 pp.323-327
- 3) 拙稿 S. Donaudy “36 Arie di stile antico” 研究 II—声楽教育の視点から— 広島大学大学院教育学研究科紀要 (文化教育開発関連領域) 第二部 第52号 2004 pp.325-333